

グリムの〈動物譚〉の分類

— 日本昔話との分類上の比較 —

Die Typen der „Tierbrautigamsmärchen“ in KHM der Brüder Grimm

— im typologischen Vergleich mit den japanischen Märchen —

小 高 康 正
Yasumasa KOTAKA

〈目次〉

はじめに

I ヨーロッパと日本の〈動物譚〉のちがい

- 1 「美女と野獣」型
- 2 「蛇簪入」型

II ヨーロッパにおける〈動物譚〉の分類と対応するグリムの〈動物譚〉

- 1 ボルテ／ポリーフカによる分類
- 2 アールネ／トムソンによる分類

III グリムの〈動物譚〉の特徴

IV 日本昔話分類との比較

まとめ

はじめに

動物と人間との結婚というモチーフを含むメルヒェン(昔話)は異類婚姻譚と呼ばれ世界中に見られるが、そのなかでも男性が動物の姿をして人間の女性と婚姻関係を結ぶ〈動物譚〉(Tierbräutigam)の話はヨーロッパでは特に「美女と野獣」の話としてよく知られている。

L. レーリッヒ(Lutz Röhrich)はヨーロッパの〈動物譚〉の話の特徴を「動物への変身と結婚による救済⁽¹⁾」という点に見ている。

これに対して日本の〈動物譚〉の話は例えば全国に見られる「蛇簪入」では、蛇はあくまで動物のままであって、結婚は成立せず、殺されるか、去っていくという不幸な結末に終わる。

このようなヨーロッパと日本の〈動物譚〉の展開の違いは話型による分類上の区別や対応関係にも影響を与えている。

この小論では、ヨーロッパのメルヒェンを代表す

る『グリム童話集』(Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm) (以下、KHMと略す)の中の〈動物譚〉の話を取り出し、その特徴を探りながら、ヨーロッパと日本の話の分類上の問題について考えてみたい。

I ヨーロッパと日本の〈動物譚〉のちがい

1. 「美女と野獣」(Beauty and the Beast)型

よく知られている「美女と野獣」型の話は大体次のような展開をしている。ある商人が財産を失う。その財産をもと通りにするために航海に出る。商人は三人の娘に向かって望みのみやげをいわせる。姉二人は高価な品物の名前をいうが、末娘はバラの花が欲しいという。商人は取引に失敗し家路につく途中、不思議な宮殿の前を通りがかり、その庭にバラの花が咲いているのを見つける。バラの花をとろうとして宮殿の主の野獣に見とがめられる。野獣は許してやる代わりに娘の一人を連れて来るように言う。家に帰り三人の娘にこの話をするが、姉二人は拒絶し、末娘が野獣のもとに行くこと申し出る。娘は野獣と暮らすうち、だんだんと野獣を愛するようになる。野獣は夜の間は人間の姿に変わる。ある日、娘の父が病気であることを知り、娘は一週間だけ家に帰ることをゆるされる。しかし野獣との約束の日限を守らなかったため、野獣は死にかける。娘は魔法により急いで宮殿に帰り、息も絶えだえの夫の野獣を見つける。娘の心からの涙と愛の誓いによって、今まで野獣にかけられていた呪いが解け、野獣は美しい王子に戻る⁽²⁾。

この「美女と野獣」型の話はアールネ／トム

ソンの『昔話の話型』⁽³⁾の国際的な分類では、425c番に入れられている(今後この分類による番号はA T 425 cのように表す)。

また、A T 425aとして、「怪物(動物)の花嫁」と呼ばれるグループで、別名、「アモールとプシケー」(Amor and Psyche, Cupid and Psyche)の話がある。この標題は西暦二世紀頃のローマのアプレイウス(Apuleius)の『変身』(Metamorphosen)の中の話に由来している。この古典の形が現在ヨーロッパで語られている話のものであるかどうかは明らかではないが、基本的な図式は変わりがない。それは「娘と神秘的な存在との結婚がテーマになっている。しかしその結婚は娘がタブーを破ることによって破綻し、夫は姿を消す。娘は夫を探しに出かけ、様々な困難にあい、最後には再び夫を見つけ出す⁽⁴⁾」というものである。

2. 「蛇掣入」型

日本昔話に見られる〈動物掣〉は「蛇掣入」や「猿掣入」と呼ばれる話が多い。「美女と野獣」型の話と発端が比較的似ている「蛇掣入」(水乞型)を取り上げてみると、次のような話の展開になっている⁽⁵⁾。

- (1) 田が干いているので、水をかけてくれた者に三人娘の一人を嫁にやると父親が独り言する。翌日、水がかかっている。
- (2) 父が娘たちに水の主に嫁に行ってくれと相談する。姉二人は断るが末娘が承諾する。
- (3) 蛇が若者になって嫁迎えに来る。
- (4) 末娘は瓢箪と針千本とをもって若者についていく。
- (5) 若者は娘を淵に連れていく。娘は瓢箪を沈めたら嫁に行くといって淵に投ずる。若者は蛇になって瓢箪を沈めようとする。その間に娘は針を投ずる。
- (6) 蛇は鉄の毒で死ぬ。
- (7) 娘は家に帰る。

話の発端は父親がある困難な状況におかれ、動物に助けを求め、そのかわりに娘を嫁にやると約束をする。そして動物が人間に姿を変えて迎えに来る。ここですでにヨーロッパの〈動物掣〉と違って、人間が動物に変身するのではなく、逆に動物が人間に化けている。結末は娘

が夫となる動物に難問を出し、死に至らしめる。結局、人と動物との結婚は成立しない。

世界に分布する人と動物との異類婚姻譚を比較して、小沢俊夫は大きく三つのタイプに分けている。つまり、エスキモー、バブア・ニューギニアなどの自然民族では、「人間と動物との間の変身は自然のこととしておき、人間と動物との結婚も、異類婚としてよりむしろ同類婚の如くにおこなわれている」。また、ヨーロッパを中心としたキリスト教民族では、「変身は魔術によってのみ可能であると考えられており、人間と動物との結婚と思われるのも、じつは、人間でありながら魔法によって動物の姿を強いられていたものが、人間の愛情によって魔法を解かれ、元の人間に戻ってから人間と結婚している」。それに対して、日本の場合は、自然民族と近いところにあり、動物そのものと人間との婚姻が語られているが、しかし、動物への拒否という日常的な感覚が入りこんできており、独特な形を作っている、という⁽⁶⁾。

小沢は異類婚姻譚の物語性の中心に人間と動物との関係の在り方を見、各民族に伝わる話を分析して、それぞれの「動物観=人間観」の違いを取り出した⁽⁷⁾。

このように、同じ〈動物掣〉をテーマにした話であっても、ヨーロッパに広く伝わる話と日本のそれとを比べると、その違いには当然これらの話を伝承してきた人々(民族)の様々な文化的背景の違いも考慮しなければならない。しかしそれと同時に、メルヒェン(昔話)という完結した形式の共通性とそこにあらわれるモチーフやその展開の仕方がどのように対応し、また違いを作っているかを考える必要がある。

II ヨーロッパにおける〈動物掣〉の分類と対応するグリムの〈動物掣〉

グリム兄弟はKHMを編集するにあたり今日行なわれているような分類の方法をとってはいない。

1812年の初版(第一巻)には86話、続く1815年の第二巻には70話の話が取り上げられた。その後、話の数は版を改めるごとに少しずつ増えていき、1857年の最終版(第7版)では、全部で昔話(メルヒェン)が200話と、あと10話の「子供の聖者伝

説」が加わった。グリム兄弟がKHMによって昔話研究の基礎を築いたと言われるように、このメルヒェン集はそれまでのように専ら「文学」的関心から作られたものではなく、ゲルマニストであったグリム兄弟の「フォークロア」的関心によって作り出された。それゆえ、初版の各巻末には、それぞれの話の類話や関連するモチーフについての注釈が付けられていた。この注釈はその後再版を機に本文とは切り離され、独立した注釈集として1822年に第三巻として出されている。

その中で、グリム兄弟自身は〈動物譚〉という言葉は用いてはいないが、KHM 108の注釈の中では、KHM 144の「驢馬の子」やストラパローラの「豚の王子」を挙げ、「これらのメルヒェンが88番や、127番などと同じ一連の親近性のある話であり、別の少し近いものもそこにつながる」と考えていた⁽⁸⁾。またKHM 88の注釈においては、いくつかの類話と共にポーモン夫人の「美女と野獣」や、アブレイウスの「アモールとプンケー」にも言及している⁽⁹⁾。

1. ボルテ／ポリーフカによる分類

グリムの注釈集をもとにグリム以後の類話を含め、膨大なメルヒェン注釈集としたのがJ.ボルテとG.ポリーフカの『グリム童話注釈集』(Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm) (以下、ボルテ／ポリーフカと省略)である。

ボルテ／ポリーフカはKHM 88「歌って跳ねるひばり」の注釈の中でいくつかの類話を挙げた後「これらの話は『鉄のストーブ』(127番)や『ハンス針鼠坊や』(88番)、『森の老婆』(123番)『驢馬の子』(144番)および『蛙の王様』(1番)などと共に〈動物譚〉(Tierbräutigam)のタイプに属する⁽¹⁰⁾と指摘している。そしてこのタイプの話のモチーフを取り出し、その展開を次のように示している。

- A1 辛抱のない両親の軽率な願いによって動物の子が生まれる。(108番のように)
- A2 娘が父親の約束によって、あるいは
- A3 本人の約束によって獣のところにやられる。
- A4 娘と父親は、小人、熊、狼、驢馬、蛇、豚、針鼠、蛙、小鳥、木などの魔法を、キスあるいは涙によって解いてやる、ときには

- B2 獣の皮を焼くことによって
- B3 首をはねることによって、魔法を解く。
- C しかし、獣の皮を早く焼いたために、あるいは、夫の秘密を姉妹に漏らさないようにといった禁止を破ったために、娘は夫を失う。
- D 娘は鉄の靴を履き、困難な旅を続けることによって、あるいは、
- D2 星のところや
- D3 風のところで行き先を尋ねたり、
- D4 下女として働いたり、
- D5 しつこい求婚者を欺いたりして
- E 三つの高価な品物と交換に、新しい花嫁から、消えた夫のもとで三晩すごすことができ、再び夫の愛を獲得する。

ボルテ／ポリーフカはこれらのモチーフの組み合わせに従って〈動物譚〉を四つのグループに分け、KHM 88を含め、先に掲げた六話の〈動物譚〉の話それぞれを属するグループに入れている。

第一グループは、だいたいA、B群のモチーフだけで成り立ち、CDEの展開が欠けている。魔法からの救済が、皮を脱ぐ、焼く、首をはねる、魔女をやっつけることによって行なわれる。KHM 1, 108, 123, 144がこのグループに入れられている。

第二グループも同様にCDEが欠けている。救済は第一グループとちがって醜い獣をだんだんと愛することによって行なわれる。それゆえこのグループは「美女と野獣」型ともよばれる。KHM 88はここに属する。

第三グループは後半のCDE、つまり夫の失踪と娘の試練が加わる。これは「アモールとプンケー」型の話となり、KHMでは127番がここに属している。

第四のグループは、ボルテ／ポリーフカも言うように、魔法にかけられた動物の救済が中心的テーマにはなっていない。

2. アールネ／トムソンによる分類

ボルテ／ポリーフカの〈動物譚〉のモチーフ構造にいくつかの小さなモチーフを付け加えて、さらに四つのグループの話をもつ話型に分類したのが、アールネ／トムソンである。その『昔話の話型』の分類では、425番から449番までの話型が「超自然または魔法にかけられた夫」のグループとなっており、グリムの話も八話が次のような話型に取り上げられている⁽¹¹⁾。

- A T 425a 「アモールとブンケー」
K H M 127 「鉄のストーブ」
- A T 425c 「美女と野獣」
K H M 88 「歌って跳ねるひばり」
- A T 426
K H M 161 「雪白と紅バラ」
- A T 430
K H M 144 「驢馬の子」
- A T 431
K H M 169 「森の小屋」
- A T 440
K H M 1 「蛙の王様」
- A T 441
K H M 108 「ハンス針鼠坊や」
- A T 442
K H M 123 「森の老婆」

アールネ／トムソンの分類で「怪物（動物）掣」の標題が付けられているのは 425 番の話型だけであるが、この 425 番は「アモールとブンケー」群（サイクル）をなしており、さらに A～P に下位区分されている。いわばこの型が〈動物掣〉の原形とみなされているようである。それは 425 番のモチーフ構造が先に示したボルテ／ポリーフカの〈動物掣〉の基本図式とほとんど変わりがなく、その基本的なモチーフ構造を基準にして他の話型との区別を行っていることから伺われる。つまり、ボルテ／ポリーフカのいう第二グループが 425c 番であり、第三グループが 425a 番となり、第一グループに一括されていたものが、個々の話型に区分されたのである。

III K H M における〈動物掣〉の特徴

A T 分類で 425 番から 449 番までの「超自然または魔法にかけられた夫」のグループに対応する K H M の八話の話を取り上げ、個々の話のモチーフ展開を考えてみよう。取り上げる順番は、K H M の番号順とする。

K H M 1 「蛙の王様、または鉄のハインリヒ」
(*Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich*)

- (1) 王に姫がおり、森の泉の中に金のまりを落とす。
- (2) 蛙が現われ、友達になることを条件にまりを拾ってくれる。

(3) 蛙は約束の履行を求めて、玄関、食卓、寝室へとやって来る。

(4) しかし、最後に姫は蛙を壁に投げつけると王子に変わり、二人は結ばれる。

(5) 翌朝、王子の家来のハインリヒが迎えに来る。

A T 440 によるモチーフ構造の骨組みだけを挙げると次のようになっている。¹²⁾

I 蛙と結婚の約束

II 蛙の訪問

III 魔法が解ける

IV 鉄のヘンリー

基本構造は K H M 1 のものと同じである。発端は類話によって様々にありえるが、たいていは娘が何らかの困難な状況におかれる。そこへ援助者が現われ、結婚の約束を条件に助けてもらう。その後、約束の履行を求めてくる。その履行が娘にとって試練となり、それに耐えることによって男にかけられていた魔法が解かれる。しかし、グリムの「蛙の王様」の魔法を解く手段は珍しい。たいていは娘が試練に耐えることや与えられた課題を遂行することによって初めて魔法が解かれるのだが、ここでは、蛙を壁にぶつけるという強い拒否の態度によって魔法が解かれている。ヨーロッパの〈動物掣〉に本質的な特徴である、「醜さと美しさというアンビヴァレンツ」をもつ「救済の愛」(*Erlösende Liebe*)¹³⁾のモチーフはこの点で、グリムの話には特異な仕方で見られているといえる。

グリムの話の最後には、家臣のハインリヒが結婚した二人を迎えに来て、王子の城に帰る途中、ハインリヒの胸に巻いた鉄の輪がはじけるという話がついている。これもグリム独特のようであるが、ここでは本筋に付けられたエピソードとして考えておくことに留める。

K H M 88 「歌って跳ねるひばり」 (*Das singende springende Löweneckerchen*)

- (1) 父親が旅に出る。三人の娘にほしい土産をきく。姉二人は高価なものを願う。末娘は「歌って跳ねるひばり」がほしいという。
- (2) ひばりを手に入れようとして獅子に命を脅かされる。命とひきかえに、家に帰って最初に出会ったものを与える約束をする。
- (3) 家に帰って最初に出会ったものは、末娘だっ

た。末娘は獅子のところへ行き、暮らす。獅子は夜は人間の姿に戻る。

- (4) 姉の婚礼に出るため娘は夫の獅子を連れて家に帰る。しかし、光をあててはならないというタブーを破ったため夫の獅子はこんどは鳩になって去る。
- (5) 娘は夫を追って旅に出る。七年たち、鳩は王子の姿に戻るが、魔法使いの王女に捕われる。
- (6) 娘は太陽、月、風の力を借りて、偽の嫁から三晩を買い王子を救い出す。

『グリム童話集』の中ではこれだけがAT 425 cに分類されている。比較してみると、前半は「美女と野獣」型の展開と変わらないが、タブーを破ったために、夫が失踪する後半は「美女と野獣」型には見当たらないことがわかる。そのためKHM 88「歌って跳ねるひばり」をAT 425 cではなく、AT 425 aに分類する考え方もある⁴⁴。

KHM108「ハンス針鼠坊や」(*Hans mein Igel*)

- (1) 百姓とその女房に子供がいない。どんな子でもいいと願うと、針鼠の子供が生まれる。
- (2) 町に出かけた父親に笛を買ってもらい、それをもって家を出ていく。
- (3) 森で道に迷った王を助け、そのかわりに城に帰って最初に会ったものをもらう約束をする。(これが二度ある)
- (4) 針鼠は約束どおり、最初に会ったもの—王の娘をもらいに行く。
- (5) 最初の王は応じないので仕返しをする。
- (6) 二人目の王の娘と婚礼をすませ、獣皮を脱ぎ、それを燃すと、針鼠は立派な若者になる。
- (7) 両親を連れてきて一緒に幸せに暮らす。

この話の発端は子供のいない夫婦に動物の子が生まれるという「異常誕生」の一つである。父親に土産を頼むが本来の筋の展開には関与していない。その後の展開は「美女と野獣」の展開と似ている。ただし、主人公は逆で、ここでは男性の側に立って語られている。

KHM 123「森の老婆」(*Die Alte im Wald*)

- (1) 主人が強盗に襲われ、奉公の娘が森に取り残される。
- (2) 小鳥が娘に食べもの、寝床、着物を与えて助

けてくれる。

- (3) そのお礼に、小鳥の願いをきき森の家のお婆さんの手から指輪を取り戻す。
- (4) すると鳥、その後は木にされていた王子の魔法が解け人間の姿に戻る。
- (5) 家来の魔法も解け、二人は結婚して幸せに暮らす。

これはKHM69の「ヨリンデとヨリンゲル」(*Jorinde und Joringel*)の話とよく似ている。こちらも森の中には老婆の姿をした魔女が住んでおり、人間を捕まえて動物に変えてしまう。ヨリンデとヨリンゲルは許婚者同士で、娘のヨリンデの方が魔法にかけられ、小鳥に変えられる。その点で〈動物譚〉のタイプと異なる。

KHM 127「鉄のストーブ」(*Der Eisenofen*)

- (1) 王子が魔法使いに魔法をかけられ、森のストーブの中に入れられる。
- (2) 森の中で道に迷った王女は、ストーブの中から王子を助け出す約束をして帰り道を教えてもらう。
- (3) 王と娘は二度別の娘をストーブのもとにやるが、王子を救い出すことができない。
- (4) 仕方なく三度目は王女が行き、ストーブに穴を開け、王子を救い出し、結婚の約束をする。
- (5) 王女は父親に会いに行くが、別れの言葉を三言以上言ってはならないというタブーを破り、王子は姿を消す。
- (6) 王女は王子を探しに旅に出る。
- (7) 三晩、失踪した婚約者のもとで過ごし、新しい花嫁から夫を取り戻す。

この話ではこれまでのものとは違って、夫になる男性は動物の姿をしているのではなく、鉄のストーブの中に閉じ込められている。〈動物譚〉においては、M. リュティ(Max Lüthi)も言うように、たしかに王子が獣の姿をしていることには象徴性がある。「獣の王子は、獣として出てこなくてはならない。次に、暗やみの中で獣の皮を脱ぐことが許される。そして最後に、日の光の中で人間の姿となることができる。⁴⁵」そのためにこの127番を〈動物譚〉にはふさわしくないという考え方もあるようだが、魔法によって閉じ込められる「獣の皮」も、ここでの「ストーブ」のなかも

共に暗闇のなかであり、グリム兄弟も指摘しているように、まさしく「地獄」(Hölle, Unterwelt)を意味しているとみることができる¹⁶⁾。

この夫が動物ではない点を別にすれば、筋の展開はまさに「アモールとブンケー」型であり、すべての要素を含んでいる。

KHM144 「驢馬の子」(Das Eselein)

- (1) 王様とお妃には子供がいなかった。どんな子供でもいいからと願うと驢馬の子が生まれる。
- (2) 驢馬の子はラウテ(楽器)を上手に弾くことができ、それをもって旅に出る。
- (3) ある国に美しい姫がいたので、その城の前でラウテを弾き、中へ入れてもらう。
- (4) 王様に何でも欲しいものをやると言われ、姫をもらい、婚礼を挙げる。その夜、驢馬の皮を脱ぎ人間の姿になる。
- (5) 王様が脱ぎ捨てられた驢馬の皮を燃すと魔法が解けて美しい若者になる。
- (6) その後、国を譲り受けて立派な暮らしをする。

この話は口承によるものではなく、ヤーコプ・グリムが14世紀のラテン語の詩句から取ってきたものをもとにしている。グリムの注釈にも触れられているように、108番の「ハンス針鼠坊や」や「アモールとブンケー」との関連で彼らのメルヒェン集に取り入れられたのであろう¹⁷⁾。

話の発端は108番と同様に子のない夫婦に動物の子が生まれることから始まる。しかしこの話には、救助、約束、試練といった〈動物譚〉のタイプの話に特徴的な一連のモチーフがすべて欠けている。主人公の驢馬はいとも簡単に姫と結婚をし、女性の側もいかなる試練もなく、また驢馬の子への強い愛も拒否も感じさせない。

KHM161 「雪白とバラ紅」(Schneeweisschen und Rosenrot)

- (1) 森の中で「雪白」と「バラ紅」という二人の姉妹が母親に育てられていた。
- (2) 冬の間毎晩、熊が暖を取りに小屋に入ってきて、朝になると帰っていった。
- (3) 姉妹は意地悪な小人を三度助けてやる。
- (4) 熊が小人を倒すと、魔法が解け、熊皮が脱げ落ちて、王子に変わる。

- (5) 雪白と王子が結婚し、母親も一緒に幸せに暮らす。

魔法にかけられて熊の姿をしていた王子が、悪い小人を殺すことによって魔法が解け人間の姿に戻り、娘と結婚するという〈動物譚〉の最低限の展開は持っている。しかし全体的にそれぞれのモチーフは本来の機能を弱められている。意地悪い小人を三度助けるモチーフも娘の試練にはならず、憐憫や親切心のあらわれとなっている。魔法が解けるのも、熊が娘達へのお礼として小人を殺した結果であり、ここでも「救済の愛」のモチーフとはつながらない。

このメルヒェンは、K. シュタル(Karoline Stahl)の『寓話、メルヒェンおよび子供達のためのおはなし集』の中の話をW.グリムが手を加えて語り直したものである¹⁸⁾。それゆえ、おそらくこの話に見られるキリスト教的信仰の信心深さや隣人愛の影響がこの話全体に及ぼされていると思われる。

KHM169 「森の小屋」(Das Waldhaus)

- (1) 樵夫婦と娘三人が森のそばに住んでいた。
- (2) 森で仕事をしている父親のところへ娘達が昼食を届ける。
- (3) 娘たちはそれぞれ道に迷い、小屋に泊めてもらう。そこには老人と家畜が住んでいる。
- (4) 姉二人は自分と老人だけで食べて寝る。家畜には何も与えなかったため、穴蔵へ落とされる。末の妹は家畜にも優しくする。
- (5) それによって、森の小屋にかけられていた魔法が解け、老人は王子に、家畜は家来に変わる。
- (6) 末娘は王子と結婚式を挙げ、姉二人は下女になる。

ここでも127番と同様に、魔法にかけられた王子は動物でなく、「氷のような白髪の老人」(ein alter, eisgrauer Mann)となっている。確かに娘によって魔法が解かれ、娘と王子は結婚するのだが、KHM161「雪白とバラ紅」のように、「救済の愛」のモチーフとのかかわりはなく、それよりも、娘の知恵が試されるというモチーフに力点がある。その意味で、この話はAT480番に分類されているKHM24「ホレおばさん」(Frau Holle)とつながる面も多く、その話の末裔か、「アモールとブンケー」型の特殊な形かは聞き手の期待や話

し手の意図によってどちらともとれるほどである。

アールネ／トムソンがAT 425番として示した「アモールとブシケー」型あるいは「美女と野獣」型の話（動物譚）のヨーロッパ型の典型と考えるならば、AT 425から442番までの話型に取り上げられた八話のグリムの話もおおよそそういったヨーロッパの特徴を持っていることがわかる。しかし、そのなかでも、KHM 88やKHM 127のように、物語の発端から結末までの基本的なモチーフ構造を備えているものから、KHM 161やKHM 169のように、一応魔法にかけられた王子がおり、娘によって魔法を解かれ、二人は結婚するというモチーフは残しながらも内容的にはかなりの変容をうけているものまで見られる。

そこでこの八話の話の発端と結末の部分から〈動物譚〉にとって特徴的なモチーフを取り上げ整理してみよう。

(1) 男性はなぜ動物の姿をしているか

これは大きく分けて二つのグループに分けられる。一つは魔法によるもの。この場合魔法をかけたのは「魔女」(eine Hexe) [KHM 1, 123, 127, 169]、「魔法使い」(Zauberer) [KHM 88] あるいは「小人」(Zwerg) [KHM 161] である。しかしなぜ魔法にかけられたかはメルヒェンでは言われない。もう一つは異常誕生によって生まれてきたもの [KHM 108, 144]。

この二つのグループの違いは物語のその後の展開にも大きな違いを与えている。それは話の全体の主人公を魔法にかけられた王子と見るか、魔法を解いてやる娘の側に見るかにもつながってくる。同時に、結末において語られる「幸福なる結婚」は誰にとってのものかともかがわってくる。

(2) どのように動物と娘との婚約がなされるか。

「美女と野獣」では父親が獣に娘をやる約束をする。この形をとっているのは、KHM 188、108である。また娘自身が結婚を約束する場合もある [KHM 1, 123, 127] が、本人の意志というよりは、もっとも大事なものを、命あるいはそれに次ぐものと引き換えに、動物／怪物との婚約が成立している。そこには娘の犠牲=いけにえという観念も含まれていると考えられる。

KHM 127「鉄のストーブ」では、約束を破るとその報復として「国じゅう何でもばらばらに懷れて、石一つ重なってないようにする」と脅かされて、いわば国を救うために娘が犠牲となって怪物（ストーブ）のところにへ行くことになる。

しかし、婚約が成立していない場合もある [KHM 123, 161, 169]。この場合は、最後には結婚するとしても〈動物譚〉のモチーフとるよりも、メルヒェンの一般的な結末としての「幸福なる結婚」という意味合いが強い。

(3) 結婚と魔法が解けることとの関係

KHM 88「歌ってはねるひばり」の話では、娘は父親のした約束にしたがって獅子のところにへ行く。「娘がつくと、親切にむかえられ、お城にあんないされました。夜になると、獅子は美しい男の人になり、婚礼がはなやかに行なわれました。二人はいっしょに楽しくくらし、夜起きていて、昼間眠りました。」しかしこの時点での結婚は「幸福な結婚」にはなっていない。夫は夜しか姿を見せず、昼間は獣のままである。この結婚生活は一時的なもので、娘がタブーを破ることによってもろくも崩れ、夫はどこかへ失踪してしまう。そして物語の結末で二人は再び結ばれて、ようやく〈ハッピーエンド〉となる。それゆえ、この場合、まず娘と動物との「不幸な結婚」が行なわれることが〈動物譚〉にとっては重要なことであり、一般に物語の結末におかれる〈ハッピーエンド〉の象徴となる主人公の結婚とは異なるのである。

「蛇掣入」など日本の〈動物譚〉ではこの始めの、人と動物との結婚が成立せず「不幸な結婚」に終ることがおおいので、さらに娘が旅に出て、長者の息子と結婚をするという「姥皮」の話が付け加えられる場合もおおい。これは、「幸福な結末に導くための語り手の意図」²⁰とも言われるが、〈動物譚〉の話の主眼がどこにあるかを示唆している。つまり、主人公のおかれた不幸な状況を幸福な結末に転ずることがどのように可能かを人と動物との結婚というテーマに語らせているのであろう。

KHM 127「鉄のストーブ」でも父親のした約束にしたがって、娘は「ストーブ」のところに

に行くが、ここでは婚礼が行われるのではなく、娘がナイフで鉄のストーブに穴を開けて中の王子を助け出さなければならぬ。この点、魔法にかけられた王子が動物の姿をしているケースとは異なるが、娘のおかれた不幸な状況に変わりはない。その後の展開は「アモールとプシケー」型と同じである。

結婚が結末にしか現われないケースもある。KHM 123、161、169の話では、先にも触れたように、男性が動物の姿をしている間には婚約が行われず、魔法が解けて人間の姿に戻ってから結婚し、それと同時に物語も終わる。

このように結婚と魔法が解かれることとの関係もいくつか考えられる。いったん結婚はするが、魔法が解かれるのは物語の結末になるものがKHM 88であり、それに近いのがKHM 127であった。KHM 123、161、169では魔法が解かれ、人間の姿に戻ってから結婚が行われた。これらの場合は、魔法も娘の自覚的な愛や試練によるよりも、動物の願いを聞いて、ある課題を果たすという形が多い。

そして、もう一つ、最後に結婚によって魔法が解かれるKHM 108や144の場合もある。KHM 108では、KHM 88と同様に、父親が娘を与えるという形で、針鼠と娘との結婚が行われ、それによって始めて人間の姿に変わることができる。KHM 144もほぼ同じで、この両者に共通しているのは、娘の側の行為についてはほとんど何も触れていない点である。このことは、これら二つの話が共に異常誕生という発端を持つことと関係があるように思われる。つまり、両親から子供が欲しいと切実に願われながら、生まれてきた子供は動物の姿をしていた。両親は驚き、呪われた子として排除しようとする。それでも、「驢馬の子」も「針鼠のハンス」も何とか成長する。そして物語の主人公として家から広い世間へと出ていく。その後の展開はそれぞれ異なるが、最後には、自分の智恵と能力によってお姫様と結婚し、それによって、呪われた動物の姿から解放され立派な人間になることができる。

このように見てくると、グリムの〈動物譚〉を大きく三つのグループに分けることができるように思われる。

一つは、KHM 88、127の話で、アールネ／トムソ

ンがAT 425番に分類したように、発端から結末に至るまでヨーロッパの〈動物譚〉にとって基本的な特徴を備えている。また、KHM 1および、KHM 123、161、169の話では、AT 425番の基本的なモチーフが欠如ないしは変質しており、単に魔法をかけられた男性（王子）が、娘に助けられて魔法が解け、もとの人間の姿に戻り結婚するという話となってしまう。

最後に、KHM 108や144の話は、他のグループと異なって、物語の主人公は明確に男性の側にあり、その男性の成長と成功の物語と見ることができる。その意味では、これらの話は日本昔話分類で言うところの「異常誕生」または「成長」の項目に入れられる話として受け取ることもできるのではないだろうか。

Ⅳ 日本昔話分類との比較

周知のように、柳田国男の昔話への関心の根本には神話とのつながりがあり、それは「桃太郎」に代表される〈小さ子〉説話と呼ばれる話に向けられていた。「日本の小さ子説話が、最初小さな動物の形をもって出現した英雄を説き、または奇怪なる妻問いの成功を中心に展開しているということは、それが右申す神人通婚の言い伝えの、まだ堅く信じられていた時代に始まっている証拠として、我々にとってはかなり大切な要点であった。」⁽²¹⁾

そして柳田のこのような関心の在り方はそのまま日本昔話の分類にも反映された。『日本昔話名彙』⁽²²⁾では「完形昔話」の中に、(1)誕生と奇瑞、(2)不思議な成長、(3)幸福なる婚姻などの項目が設定され、それぞれに以下のような話が分類されている。

誕生と奇瑞…「桃太郎」「力太郎」「瓜子姫子」
「子育て幽霊」「一寸法師」など
不思議な成長…「蛇息子」「田螺長者」「蛙聾入」
など
幸福なる婚姻…「天人女房」「鶴女房」「蛇聾入」
「蛙聾入」など

柳田の分類の考え方では、〈動物譚〉の話は特に一つの項目としては分類されず、「誕生」「成長」「婚姻」の項目にまたがっている。

その後、関敬吾によって『日本昔話名彙』の分

類を踏まえつつ、アールネ／トムソンなどの国際的な分類との比較を考慮した分類がなされた。関は、『日本昔話集成』では「本格昔話」の中に「四、異類婚姻」「五、異常誕生」の項目を置き、「異類婚姻」はさらに「A、異類聾」と「B、異類女房」に分けられている。次の『日本昔話大成』においても分類方法はほとんど変わりはないが、名称と位置が少し変わり、「一、婚姻：異類聾」、「二、婚姻：異類女房」「三、婚姻：難題聾」、そして、「四、誕生」となった。

柳田の分類と比べると、「誕生」と「成長」が一つにされ、「婚姻」の中に「異類聾」「異類女房」の項が新たに設定されている。

このような日本昔話の分類とヨーロッパ大陸を中心としたアールネ／トムソンの分類との対応関係を作るのは必ずしも容易なことではないが、関の分類は国際的な比較を念頭に置いたものであった。

関は『日本昔話大成』の「四、誕生」の項目に134番「田螺息子」（田螺長者とも呼ばれる）を、135番に「蛙息子」を分類し、後者の「蛙息子」と同じタイプの話として、グリムのKHM1「蛙の王様」を挙げている。

「蛙息子」の話とは次のようなものである。⁽²³⁾

- (1) 子供のない夫婦がからだに不足があってもいいからと神に祈願する。
- (2) 妻は蛙の子を生む。
- (3) 蛙は金持ちの美しい娘のところに通うが嫌われる。
- (4) 娘のところに通う途中で蛙は池の中にけ込まれて鯉に飲まれる。
- (5) 父親が鯉を釣り上げ、蛙が腹から出て立派な若者になる。
- (6) 彼は娘と結婚する。

蛙が人間に変わり、娘と結婚するという点ではグリムの話と共通するモチーフではあるが、話の発端や人間への変身の仕方に違いが見られる。グリムの方では、男性が蛙の姿をしていたのは異常誕生ではなく、魔法によるものであり、人間に変わる場合も娘との約束とその履行という前提があった。つまり日本の「蛙息子」は「誕生」の項に分類されているように異類婚のモチーフを中心に見られてはいない。

それに対して、「田螺息子」とグリムのKHM 108「ハンス針鼠坊や」との方が、発端から結末に到る物語の展開という全体性から見て対応関係が強いように思われる。「田螺息子」の発端は子供のない夫婦が神に祈願して、田螺を拾って自分達の子供にする。妻の脛や親指から生まれる場合もある。その後嫁探しをして知恵をもって長者の娘と結婚する。最後に人間に変わることによって幸せに暮らすというものである。⁽²⁴⁾

関は「ハンス針鼠坊や」を取り上げ、「前半はむしろ『水乞型』『猿聾入型』と同一モチーフで、後半は田螺息子の後半と同一である」と話型の全体的な対応関係の難しさをほのめかしているが、全体としては「我が国の異類婚姻譚をヨーロッパの同種の昔話と比較すると、我が国の伝承はほとんど人間の形態を取って婚姻関係を結ぶが、ほとんど人間によって両者の間で守らなければならない規範が破られ、破局に終わる。異類の姿に還って去って行く。ヨーロッパの伝承はこれと逆の形式を取っている。田螺聾は最初動物として人間の女性と結婚するが、結婚することによって人間の姿に還る。ヨーロッパの伝承と共通する例である」と述べている。⁽²⁵⁾

むすび

日本昔話分類では、〈動物聾〉の話は、発端の誕生のモチーフと、結末の結婚のモチーフのいずれに話全体の力点があるかによってグループが異なっていた。それに対して、アールネ／トムソンらの分類では、発端の誕生のモチーフは物語の発端の可能な一つのモチーフとしかみなされず、結局は最後の結婚のモチーフに重点が置かれている。

それはおそらく異常誕生のモチーフの位置づけの違いによるのであろう。共に子供のいない両親に願われて生まれてくるのだが、日本の場合、神様によって授けられた申し子として大事に育てようとするが、グリムに出てくる話では、神による罰として受け取られていた。グリムの「ハンス針鼠坊や」の注釈においても、「神に性急に子供が欲しいと願う人々はメルヒェンにおいてしばしば異常な誕生によって罰せられることがある。しかしその後両親が謙虚になることによって人間に変わる」というとらえ方がなされており、アールネ／トム

ソンと共にヨーロッパを中心とするメルヒェンの分類の確立に寄与したボルテ／ポリーフカもこういう考え方を踏襲していた。²⁷⁾

ヨーロッパのメルヒェンにおける、このような異常な誕生に対する否定的な見解が直接的に話型の分類に反映したとは思われないが、日本昔話研究の始まりに柳田国男の『桃太郎の誕生』があったことを考えると、その後の日本昔話の分類に与えた影響は大きいと言わざるを得ない。

だが、現在、日本の昔話の分類をほぼ確立したと見られる関は、『日本昔話の比較研究』において、「これまで『田螺息子』『一寸法師』など発端の異常誕生のモチーフを中心に研究されたが、全体的に見るときは、いずれも主題は婚姻にある。この立場から再検討する必要がある。²⁸⁾」とするヨーロッパ的な考え方を示している。

同じ〈動物聲〉というテーマをもつ昔話であっても、日本とヨーロッパの分類を対応させることは難しい。どちらかに基準を合わせるだけでは根本的な解決策にはならない。重要なことは、「真の意味の昔話はいずれも婚姻に結びつく」とはいえ、発端から結末に到るモチーフの全体性の中で婚姻の持つ意味を考えることであろう。

使用テキスト：Rölleke Heinz (Hrsg.): *Brüder Grimm. Kinder - und Hausmärchen.* 3 Bde. (Reclam) Stuttgart 1980.

『グリム童話全集』高橋健二訳 小学館 1984年 参照
(1990. 4. 18 受理)

註

- 1 Lutz Röhrich: *Märchen und Wirklichkeit.* Wiesbaden 1974 92
- 2 稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂 1977年 770-771頁。『世界の民話』(南欧編)安達茂之他訳 ぎょうせい 1977年 参考
- 3 A. Aarne / S. Thompson: *The types of the folktale.* Helsinki 1981, S. 143.
- 4 K. Ranke: *Enzyklopadie des Märchens.* Bd. 1, S.463f., „Amor und Psyche“.
- 5 関敬吾 『日本昔話大成』11 角川書店 1980年 23頁

- 6 小沢俊夫『世界の民話』(中公新書) 1979年 187-188頁
- 7 同上書、189頁
- 8 *Grimms Anmerkungen,* in: Rölleke Heinz (Hrsg.): *Kinder - und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe auf der dritten Auflage (1837) Frankfurt 1985, S. 1051.*
- 9 *Ibid., S. 1015.*
- 10 J. Bolte / G. Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder - und Hausmärchen der Brüder Grimm,* Leipzig 1913 - 1932, Nachdruck Hildesheim 1963, Bd. 2, S. 234f.
- 11 A.Aarne/S.Thompson, a.a.O., S.140-151.
- 12 *Ibid., S.149.*
- 13 Lutz Röhrich: *Wage es, den Frosch zu Küssen!*, Köln 1987. S.37.
- 14 Walter Scherf: *Lexikon der Zaubermärchen.* Stuttgart 1982, S. 358ff.
- 15 マックス・リュティ『昔話の解釈』野村滋訳 福音館書店 1982年 157頁
- 16 *Grimms Anm., Rölleke, a.a.O., S.1074.*
- 17 *Ibid., S.1051.*
- 18 Vgl. Bolte/Polivka, Bd.3, S.259, L. Rölleke: „Wo das Wünschen noch geholfen hat“, Bonn 1985, S. 191ff.
- 19 W.Scherf, a.a.O., S.423.
- 20 関「大成」2、45頁
- 21 柳田国男『桃太郎の誕生』(角川文庫) 1983年 41頁
- 22 『日本昔話名彙』柳田国男監修 日本放送出版協会編、1954年
- 23 関「大成」11、31頁
- 24 関「大成」11、31頁
- 25 関「大成」3、24頁
- 26 *Grimms Anm., in: Rölleke, a. a. O., S. 1051.*
- 27 Bolte/Polivka, Bd.2, S.483.
- 28 関敬吾『関敬吾著作集・第四巻』同朋社 136頁
- 29 同上